メッセージアウトライン
サムエル記第二5：1～25
「イスラエルの王となるダビデ」

4章の要約
サウルの子イシュ・ボシェテは将軍アブネルがヘブロンで死んだことを聞いて、気力を失った。
アブネルなしにはイシュ・ボシェテ政権がもたない。そればかりか仲介者としてのアブネルが死んでからはヘブロンのダビデ王国への合流も危ぶまれる。それを見透かしたように二人の暗殺者が現れ、イシュ・ボシェテの邸宅に忍び込み、寝ていた彼の首をはね、その首をもってダビデのもとに逃走した。彼らは執拗にダビデのいのちを狙っていたサウルのその子であるイシュ・ボシェテの首を持って来たことでダビデに良い知らせをもたらし、大いにほめてもらえると思っていたかもしれないが、その結果は全く逆で、彼らはサウルの死を知らせに来たあのアマレク人の男と同じ報いを受けることとなった。→Ⅱサムエル1章　そしてイシュ・ボシェテの首は先に葬られていたアブネルの墓に葬られることになった。
5章
[1-3]「イスラエルの全部族は、ヘブロンのダビデのもとに来てこう言った。『ご覧ください。私たちはあなたの骨肉です。これまで、サウルが私たちの王であったときでさえ、イスラエルを動かしていたのはあなたでした。主はあなたに言われました。【あなたがわたしの民イスラエルを牧し、あなたがイスラエルの君主となる】と。』イスラエルの全長老はヘブロンの王のもとに来た。ダビデ王はヘブロンで、主の御前に彼らと契約を結び、彼らはダビデに油を注いでイスラエルの王とした」
これでダビデはユダの長老とイスラエルの長老の両方から油を注がれたことになる。→2:4
イスラエルの全部族は各部族の長老によって代表されたのであろう。彼らがダビデに言ったことばは、サムエルや他の預言者たちが彼に伝えていたことばであったのだろう。
「骨肉」とは親族のような親近関係をあらわすことばである。
彼らはダビデの出身部族であるユダ族と同等の権利を求めたのであろう。それでダビデは主の前に彼らと契約を結び、彼らはダビデに油を注いで王としたのである。北方のイスラエルも、これまではユダの王であったダビデを自分たちの王として認めたのである。
[4-5]「ダビデは三十歳で王となり、四十年間、王であった。ヘブロンで七年六か月ユダを治め、エルサレムで三十三年イスラエルとユダの全体を治めた」
主の恵みにより彼は長きにわたってイスラエル全体を治めることができた。

[6-7]「王とその部下は、エルサレムに、その地の住民エブス人のところに行った。すると彼らはダビデに言った。『おまえは、ここに攻めて来ることなどできない。目の見えない者どもや足の萎えた者どもでさえも、おまえを追い出せる。』彼らは『ダビデがここに攻めて来ることはできない』と考えていたのである。しかし、ダビデはシオンの要害を攻め取った。これがダビデの町である」

「シオン」とは乾燥した地という意味。

士師記の時代、エルサレムはイスラエルのユダ部族によって　攻め取られていたが、それは一部であり、あいかわらず先住民であるエブス人はそこに住み続けていた。→士師1:8、21

エルサレムに来たダビデに対して、エブス人たちは「おまえはここに攻めて来ることなどできない」と嘲った。「目の見えない者どもや足の萎えた者ども」とは最も弱い者の代表例。

しかし、結論から言えば、ダビデはこの要害を攻め取った。そしてそこをダビデの町としたが、それはエルサレムの南東の部分で南北約370メートル、東西約120メートルの土地であったことが分かっている。エルサレム全体はもっと広い。

ダビデはこのエルサレムを選びイスラエルの首都としようと考えたようである。その理由は、

①エルサレムが敵が攻めにくい難攻不落の天然の砦。

②イスラエルのどの部族にも支配されていない。

③地理的にイスラエルの中心。

④サウルの出身部族のベニヤミンとダビデの出身部族のユダの境界線上にある。

⑤先祖アブラハムの時代からの由緒ある地である。アブラハムはこの地で主の命により、息子イサクを主にささげようとして、その信仰を主に認められ祝福された。→創世記22章

[8] ここではどのようにダビデとその部下がその地を攻め取ったかが記されている。彼らは「水汲みの地下道」を通ってエブス人たちを討った。エルサレムは丘の上にあるので水は貴重であり、それは場外の泉から地下道を通して町に運び入れられていた。ダビデたちはその地下道を利用して、エルサレムに入りエブス人たちを攻撃したのである。ダビデはエブス人たちが言った嘲りのことばをそのまま使い、「だれでもエブス人を討とうとする者は、水汲みの地下道を通って、ダビデの心が憎む『足の萎えた者どもや目の見えない者どもを討て』と言った。これはエルサレムの町を守るエブス人兵士たちのこと。そしてこのことばから、後にエルサレムに王宮が造られたとき、「目の見えない者や足の萎えた者は王宮に入ってはならない」ということが定めとなった。

[9-10]「ダビデはこの要害に住み、これを『ダビデの町』と呼んだ。ダビデはその周

りに城壁を、ミロから一周するまで築いた。ダビデはますます大いなる者となり、万軍の神、主が彼とともにおられた」
「ミロ」とは「満たし」という意味で、土を満たした土塁からつけられた名と思われる。エルサレムは西、東、南と三方は谷に囲まれて天然の要塞のようになっていたが、北側は谷がなく攻撃されやすかったので防御のため人工の壁を築き、さらに町を一周するようにしたのであろう。
ダビデは主がともにおられたので、エルサレムで、ますます繁栄し、大いなる者となった。
[11-12]「ツロの王ヒラムは、ダビデのもとに使者と、杉材、木工、石工を送った。彼らはダビデのために王宮を建てた。ダビデは、主が自分をイスラエルの王として堅く立て、主の民イスラエルのために、自分の王国を高めてくださったことを知った」
「ツロ」はイスラエル北方のフェニキヤ人の地中海に面した都市国家。その王ヒラムはダビデのために資材と技術者を送り、彼のために王宮を建てた。ダビデとヒラムがどのようなつながりがあったのかは分からないが、ツロもペリシテ人からの圧迫を受けていた可能性があるので、対ペリシテという関係でダビデと親しい交わりを持っていたのかもしれない。
イスラエルの国内だけでなく、外国からもこのような好意を寄せてくれる人々がいることでダビデは主なる神が彼をイスラエルの王として堅く立て、彼の王国を高めてくださったことを知ったのであった。
[13] ダビデはエルサレムでさらに側女たちと妻たちを迎えた。そこでさらに息子たち、娘たちが生まれた。聖書は正直にこのようなことも記録している。
[14-16] ここはエルサレムで生まれた子どもたちのリストである。(娘たちは書かれていない)
シャムア、ショバブ、ナタン、ソロモン(この四人はウリヤの妻であったバテ・シェバから生まれた→Ⅰ歴3:5)、イブハル、エリシュア、ネフェグ、ヤフィア、エリシャマ、エルヤダ、エリフェレテ。(男だけで十一人である) ヘブロンでは男の子が六人生まれている。→3:2~6
[17-18]「ペリシテ人は、ダビデが油注がれてイスラエルの王となったことを聞いた。ペリシテ人はみな、ダビデを狙って攻め上って来た。ダビデはそれを聞き、要害に下って行った。一方、ペリシテ人はやって来て、レファイムの谷間を侵略した」
ダビデはペリシテ人が自分を狙って攻め上って来たことを知り、要害に下って行った。これはサウルの時のように逃げたのではなく、ペリシテ軍を見渡すことができる場所にエルサレムから下って行ったということであろう。「要害」とは洞穴、砦、要塞、拠点などと様々に訳せることばである。
「レファイムの谷」はエルサレム西方の谷。
[19-21]「ダビデは主に伺った。『ペリシテ人のところに攻め上るべきでしょうか。彼ら

を私の手に渡してくださるでしょうか。』主はダビデに言われた。『攻め上れ。わたしは必ず、ペリシテ人をあなたの手に渡すから。』ダビデはバアル・ペラツィムにやって来た。ダビデはそこで彼らを討って、『主は、水が流れ出るように、私の前で私の敵を破られた』と言った。それゆえ、その場所の名はバアル・ペラツィムと呼ばれた。彼らはそこに自分たちの偶像を置き去りにした。そこでダビデとその部下はそれを運び去った」

ダビデが主に伺った方法は今までと同様にウリムとトンミムによったのであろう。主はダビデにペリシテ人のところに攻め上れ、そして彼らを必ずダビデの手に渡すと言われた。それでダビデの軍は主のことばのとおりペリシテ人のところに攻め上り、彼らを打ち破った。その場所のバアル・ペラツィムという名は「ほとばしり出る水の主」という意味で、ほとばしり出る水が障害物を一掃するように主がペリシテ人を打ち破ってくださったことを示すのであろう。ペリシテ人たちの置き去りにした彼らの偶像はダゴンやアシュタロテ。ダビデたちはそれを運んで焼き捨てたのであろう。いくら戦いに担ぎ出しても偶像には何の力もないのである。

[22-25]「ペリシテ人は、またも攻め上り、レファイムの谷間を侵略した。ダビデが主に伺うと、主は言われた。『上って行くな。彼らのうしろに回り込み、バルサム樹の茂みの前から彼らに向かえ。バルサム樹の茂みの上で行進の音が聞こえたら、そのとき、あなたは攻め上れ。そのとき主はすでに、ペリシテ人の陣営を討つために、あなたより先に出ているからだ。』ダビデは主が彼に命じられたとおりにし、ゲバからゲゼルに至るまでのペリシテ人を討った」

またもペリシテ人が攻め上って来た。主は今度は彼らのうしろに回り込み、バルサム樹の茂みの上で行進の音が聞こえたら攻め上れと言われた。バルサム樹はアラブ原産の大きく育つ木で、葉をちぎると白い涙のような汁が出る。緑の少ないイスラエルにも植樹されていたのであろう。

「バルサム樹の茂みの上で行進の音が聞こえたら」とはペリシテ軍を驚かすための主なる神の働きである。神の軍（天使たち）による足音か。思いもよらぬイスラエルの大軍の足音にうろたえる間に、ダビデたちはペリシテ軍をうしろから攻撃したのである。その結果は大勝利であった。

「ゲバ」はレファイムの谷にある地域と思われる。「ゲゼル」はエルサレムの北西約30キロメートルの町。戦いはかなり広範囲であったことが分かる。

この勝利はかつてペリシテ軍に神の箱を奪われ、栄光は去った（イ・カボデ）と嘆いたイスラエル人の屈辱（Ⅰサムエル4章）を完全に晴らすものであった。

このようにしてダビデの王権は確立し、ユダとイスラエルは統一王国として繁栄することになるのである。

サウルがイスラエルの王であったときには、その不信仰のゆえに答えてくださらなかった主なる神が、信仰をもって主により頼むダビデには答えてくださり、勝利へと

導いてくださったのである。この戦いは主の戦いであった。

私たちも様々な問題に直面するときに人間的な解決を模索するのではなく、まず信仰をもって主により頼み、最善の導きを願っていく必要がある。そこに救いがあり、主の御栄光があらわされるのである。→箴言3:5〜6